
日本語ヴォイスの歴史的成立と展開について

釘 貫 亨

〈名古屋大学〉

1. 自動詞と他動詞が形態的に対応する日本語

文法的カテゴリーとしてのヴォイスについて、西洋諸語では受動態と能動態の対立として広く知られた概念であるが、日本語においてもヴォイスの体系が存在すると考えられる。現代日本語を例に挙げれば、文法形式レル・ラレルを動詞に付加する受身文の存在が構成要素である。西洋諸語の受動態は、能動態と文法的対応関係を有する。これに対して日本語の受身は、「非受身」つまり能動態とは対応していない。日本語の受身形式レル・ラレルは、使役と呼ばれる文法範疇と意味的にも形態的（セル・サセル）にも対応すると考えられる。ここで注目されるのは、日本語の受身と使役の対立の間に介入しているのが、自動詞と他動詞の対応（以下、自他対応という）関係である。日本語は、自動詞と他動詞の区別が積極的な標識を伴ってペアーを構成することが多いという点で世界の諸言語の中でも個性的な特徴を持っている。

掛かる(自)―掛ける(他)、留まる(自)―留める(他)、切る(他)―切れる(自)
うつる(自)―うつす(他)、尽きる(自)―尽くす(他)、隠れる(自)―隠す(他)
枯れる(自)―枯らす(他)、曲がる(自)―曲げる(他)

日本語ヴォイスの体系は、意味的にはもちろん形態的にも自他対応と密接に関連していることに疑問の余地がない。自他の対立が拡張して、受身使役の対立が成立するという関係である。このような、現代日本語の受身と使役の形態的対立とその間に介在する動詞の自他対応は、平安時代以後成立した。奈良時代以前において受身と使役は文法的に対応せず、形式的にはユ・ラユ/シムという排他的な関係を維持していた。次の例は『万葉集』に見えるものである。

かにかくに思ひ^レ勞ひ^レねのみし^レ泣か^レゆ (祢能尾志泣可由) (巻5、897山上憶良、天平5年)
布施置きて我は乞ひ^レ祈む^レ欺かず直に率行きて天路知らし^レめ (之米) (巻5、906)

受身ユ・ラユは、「いわ^レゆる」「あら^レゆる」のような慣用句にだけ痕跡を残して平安時代に消滅し、シムは漢文訓読の訓法用語として僅かに命脈を保って今日に至っている。

ユ・ラユ/シムという排他的対立に替わって、平安時代初頭にル・ラル/ス・サスというシンメトリカルなヴォイスの対立が新たに登場し、現代日本語（レル・ラレル/セル・サセル）に継承されているのである。受身と使役に関する伝達要求は、奈良時代から既に満たされていたにもかかわらず、既存の形式をわざわざ廃棄して、何故シンメトリカルな形式を採用するに至ったのであろうか。その歴史的要因とその後の日本語の展開について考えてみたい。

2. 日本語動詞自他対応の歴史的由来

現代日本語に観察される自他対応は、奈良時代語に淵源を見るのである。奈良時代語の動詞自他対応は、形態的に次の三種類に分類することが出来る。

第Ⅰ群動詞（活用の種類の違いに基づく自他対応）

入る（四段自）—入る（下二段他）
 垂る（四段自）—垂る（下二段他）
 立つ（四段自）—立つ（下二段他）
 切る（下二段自）—切る（四段他）
 解く（下二段自）—解く（四段他）
 焼く（下二段自）—焼く（四段他）

第Ⅱ群動詞（語尾の違いに基づく自他対応）

成る（自）—成す（他）
 寄る（自）—寄す（他）
 余る（自）—余す（他）
 隠る（自）—隠す（他）
 顕はる（自）—顕はす（他）

第Ⅲ群動詞（語尾の違いと語幹増加による自他対応）

荒る（自）—荒らす（他）
 明く（自）—明かす（他）
 栄ゆ（自）—栄やす（他）
 上ぐ（他）—上がる（自）
 曲ぐ（他）—曲がる（自）
 了ふ（他）—了はる（自）

これらの三種類の自他対応例のうちで最も数が多く、しかも平安時代以後も増産されたのが第Ⅲ群動詞である。第Ⅰ群は、四段、下二段がどれも自他両方を表示することがあり標識が消極的である。第Ⅱ、第Ⅲの形式は、ル＝自動詞、ス＝他動詞、を表示して例外が無く積極的である。また、第Ⅲ群形式は、派生源動詞がどのような語尾を持っているかを選ばない点で造語生産性に最も優れており、事実このペアが最も多い。私見によれば、自他の対立という単一の情報が三種類の異なった形態によって担われるという不合理は、これらがそれぞれ異なった歴史的段階に当座の伝達要求を満たすためだけに対応して生起したものであって、最終的に標識が積極的で造語生産性の高い第Ⅲ群形式が繰り出されたことで伝達要求が終息し、三形式が並立するという事態になったと説明することで解決する。第Ⅱ群と第Ⅲ群は、ル（自動詞）ス（他動詞）という標識が分明で積極性を持ったので、この対立に類推する形で受身助辞ル・ラル、使役助辞ス・サスが平安時代に成立した。

動詞自他対応とそれを拡大的に類推して成立した受身使役が対立するという日本語独自のヴォイスの体系がこのようにして出来上がった¹。

1 拙著『古代日本語の形態変化』第3部（和泉書院、1996）

3. 歴史文法学的観点から見た日本語ヴォイスの特徴とその歴史的成立

以上の説明は、従来の古典文法学に対して次のような有利な点を持つ。すなわち、従来の日本古典文法学は、8世紀以前の上代語の受身と使役の助辞ユ・ラユ/シムが平安時代9世紀以後ル・ラル/ス・サスと交替したことだけを告げている。しかし、これでは、既に満たされていたはずの受身使役の既存の形態をわざわざ廃棄して、全く新しい形態と何故この時期に交替させる必要があったのか、という当然の問いに答えることが出来ない。

これに対して前節の説明は、奈良時代における自他対応第Ⅱ群動詞と第Ⅲ群動詞の多量増産が新時代の受身使役形式成立の背景となって、文法的機能の貧弱な既存の形態を駆逐する要因になったと説明することが出来る。古典解釈に集約される古典文法に対して、歴史文法学は当該の変化が何故生じ、何故そのときに生じたのかを併せて説明しなければならない。我々は、古典解釈に解消されない文法の歴史的変遷の合理性を説明する立場を確立すべきである。

平安時代以後、従来のユ・ラユと交替して、文法的機能の旺盛ナル・ラルが成立したことに伴って、多様な局面における日本語文の表現力が拡大した。まずル・ラルは、類型的画一的な表現を離れて多様で自由な表現環境の中で飛躍的に用例数を増した。筆者の調査によれば、万葉集において受身助辞ユ・ラユに上接する動詞は9語であるのに対して、古今和歌集、後撰和歌集、拾遺和歌集の所謂三代集においてル・ラルに上接する動詞が58語と文法的機能が大幅に向上した²。平安時代のル・ラルの用例は、固定的で典型的なユ・ラユの用例に比べて数が多いばかりでなく表現が多様で類型性を免れた自由な表現が特徴である。日本語の受身と使役は動詞の自他の対立に類推して平安時代に成立したのであるが、その経緯に規定されて特に日本語の受身は自発性を原義として、ヨーロッパ諸語の受動態のように明晰な受動性を表示しない。また欧語の受動態は、英語のbe動詞のようなコピュラ動詞に他動詞の過去分詞を連結して表示するが、言うまでもなくその原義は過去時制にある。したがって欧語の受動態には、動作作用がすでに行われたというテンスアスペクト的な両義において「過去」の意味が前提的に含意されるという³。

これに対して、日本語の受身は、自発が原義であり、過去の意味を含意しないので、彼我のヴォイスの体系と意味には、ずれが存在する。このことがはっきり露呈するのは、欧語の受動態と日本語の受身を用いた名詞修飾においてである。例えば、英語の

broken door reserved seat masked truth

のような形容詞的（過去分詞的）名詞修飾を日本語に翻訳する場合、

壊される扉 予約される席 隠される真実

のように受身そのままに「直訳」したのでは、本義が伝わらない。そこで、

壊された扉 予約された席 隠された真実

と「過去」情報を補って翻訳する必要が生ずる。このことは、英語の受動態が過去情報を前提的に含意し、日本語の受身はそれが無いことを証明する。

このように英語の過去分詞を用いた連語の日本語訳に過去表示のタを用いるが、これは古代日本語のタリ

2 注1 拙著

3 A Comprehensive Grammar of the English Language (17.101), Longman, London and New York, 1985

荒木一夫、安井稔編『現代英文法辞典』「past participle 過去分詞」(三省堂、1992)

に遡る形式である。古代日本語では、アスペクト的な完了を表示するツ、ヌ、タリ、リとテンス的な過去時制を表示するキ、ケリという多様な区別が存在したが、鎌倉時代から室町時代にかけての13世紀から15世紀頃にかけて大規模な再編成が起こり、タリの後継形式であるタ(ダ)一極に収束するという大変化を被った。現代日本語の過去時制と完了態を統合的に表示するのがタ(ダ)であり、かかる歴史的収束を退化と捉える研究者もいるが、この顕著な事実の原因は未だ解明されていない難問である。

4. 完了辞タリの成立の由来

興味深いことに、タの祖型であるタリが奈良時代を長く遡らない時期に名詞修飾を任務として新たに登場してきた。完了辞タリは、同じ完了辞リ、断定辞ナリとともに奈良時代以前のはぼ同時期に成立してきたと考えられる⁴。それは次のような理由に基づく。

- ①完了辞リ、タリと断定辞ナリは、それぞれ、動詞連用形+アリ、動詞連用形テ+アリ、名詞或いは動詞連体形ニ+アリという連結を通じて成立した。特に、タリとナリは、元の形であるテアリ、ニアリが奈良時代語に観察されるのでそのことが明らかである。
- ②リ、タリ、ナリは、奈良時代語最大の資料である『万葉集』において共通して名詞（連体）修飾に突出した用例数を持つ。
- ③以上の特徴からみてリ、タリ、ナリが同時期に共通の文法的機能を担って古代日本語に登場したと考えるのが合理的である。

日本語動詞の名詞（連体）修飾には、性質の異なる二つの統語構造が存在する。一つは「太郎が歩いた道・バケツを持つ人・花子にあげた指輪」のような、述語部の動詞が主格その他の必須な項を取りつつ名詞修飾を行うものと「浮いた噂・壊された扉・失われた記憶」のように、動詞が先行する文脈に依存せず、あたかも形容詞のように振る舞うものである。前者が節 phrase と呼ばれ、後者が動詞を用いた形容詞的用法というべきものである。名詞修飾節と形容詞的用法は、日本語では格助詞に代表される文法的項を取るか取らないかによって消極的に区別されるに過ぎないが、西洋諸語に翻訳する際には前者に関係代名詞を立てる一方で、後者は英語で running man（走る人）broken door（壊された扉）のように現在と過去に渉る分詞 particle を使用するだろう。分詞とは、文字通り形容詞の謂いである。英語では、

a man who holds his liquor well（酒に強い男）

a girl who returns her home to get an umbrella（家に傘を取りに帰る女の子）

のように動詞述部が文法的項を要求する統語構造においては、関係代名詞を介入させて名詞修飾を行う。日本語動詞の分詞的（形容詞的）用法が見えにくいのは英語のような現在分詞（ing）過去分詞（ed その他）のような専用形態を持たないからである。日本語の現在分詞は、「咲く花の匂ふが如く 飛ぶ鳥を落とす勢い」のような基本形で現れ、過去分詞は、「浮いた噂 壊された扉」のような過去情報助辞を伴った形で表示する。

古典語の過去辞キ・ケリ・ツ・ヌ・タリ・リ全体に過去分詞を構成する能力が備えられていると一応考えられるが、古代語では、過去分詞を実際に構成することができるのが専らタリであった⁵。名詞修飾に突出した用例を持つリ、タリ、ナリの8世紀の資料における使用法を観察すると、タリが先行文脈に依存しない形容詞的用法において特徴を有することが判明した。

4 拙稿「奈良時代語の状態化標識として成立したリ、タリ、ナリ」『国語学』第54巻4号、2003

5 拙稿「動作の結果継続を表す名詞修飾の歴史的動態」『名古屋大学国語国文学』100（名古屋大学国語国文学会、2007）

形容詞的用法に使用されたタリは、『万葉集』では「残りたる雪・咲きたる梅の花・後れたる我・絶えたる恋・荒れたる都・雅たる花・後れたる君・後れたる兎原壮士・たぶれたる醜つ翁・栄えたる千代松の木・たみたる道・荒れたる家・振りたる君・籠もりたる我が下心」の諸例に及び、何らかの意味で過去の情報を持つキ・ケリ・ツ・ヌ・タリ・リのうちで組織的な形容詞的用法を持つのはタリだけである。すなわち古代日本語において過去に行われた動作・作用の結果が現在におよんでいることを表示する過去分詞の標識はタリだけであった。形容詞的用法に用いられるタリは、9世紀平安時代にいたって一層の発達と膨張を遂げる。私が現在調査中の資料によれば、9世紀から13世紀にかけての王朝古典文学作品における散文のキ・ケリ・ツ・ヌ・タリ・リの過去辞が介入する名詞修飾の中でタリの占める割合が圧倒的に多く、その要因が形容詞的用法の突出した拡大にあった。この事実の後代の日本語文法体系に及ぼした原因について、近日中に公表する予定である。

古代日本語におけるタリが介入する形容詞的用法には先の「荒れたる都」「絶えたる恋」などのほか、

萎えたる衣 あきれたる気色 書きなれたる手 やつれたる旅姿 すぐれたること 乱れたる心 世馴れたる人 枯れたる下草 鄙びたる守 浮きたる心地 (『源氏物語』)

など現代語においても十分通じる表現が極めて多数存在している。このことは、タリ介入型形容詞的用法の表現力と歴史的耐久力の強さの証明である。タリ介入型の形容詞的用法は、他の過去辞が介入する型と違って、文脈からの離散性が強く、それゆえ汎用性が高く、それゆえ歴史的耐久性が強いのであると考えられる。

5. 過去分詞の標識としてのタリの歴史的展開

王朝古典文学作品に現れたタリの形容詞的用法の制約的特徴は、その上接動詞の資源のほとんどが自動詞であるという点である。自動詞は、意味的特徴からみて物事の状態を表示する形容詞と親和性があり、その点から形容詞的用法に動員されるタリに上接する動詞が自動詞であることはある意味で当然である。しかしながら、英語の過去分詞が名詞修飾を行う際には

reserved seat broken door masked truth tried method

のように他動詞が数多く動員されている。これは、過去分詞が英語を始めとする欧語では受動態の標識でもあるので他動詞に受動の意味が付与されれば自動詞に転換できるのである。その結果、英語では他動詞を形容詞的用法に多量動員することが可能なのである。英語の過去分詞を使った名詞修飾は、過去に生じた動作作用の結果が継続する状態を表示することが出来るのは過去分詞の持つ過去情報による。英語過去分詞による名詞修飾は、過去動作の結果継続と他動詞から転換した自動性とを併せ備えているのに対して、タリによって標識された日本語過去分詞は、過去情報だけを表示するので資源動詞は自動詞に限定されるのである。

タリを接続した日本古代語の過去分詞的用法においても受身助辞を付加して、「他動詞・受身・タル・名詞」の連結を作れば、上記の英語のような過去分詞的用法を増産することが出来るはずである。しかしこれが奈良時代語では全く機能しなかった。なぜなら、奈良時代語の受身助辞ユ・ラユは、前記のように固定的類型的表現の中にしか使われなかったため、他動詞の自動詞転換には全く使い物にならなかった。平安時代以後、文法機能の旺盛なル・ラルが出現して、大いに他動詞の自動詞変換に活躍して過去分詞的用法が増加したのかと言えばそのようにならなかった。「他動詞・受身・タル名詞」型の名詞修飾すなわち「隠されたる真相」「魅せられたる魂」の如き表現はごく限定的にしか出現しなかった。平安時代以後も変わらず、タリ介入型の形容詞的用法の資源動詞は自動詞に偏ったのである。それはなぜであろうか。「隠されたる真相」のような用法が成立するためには、その前提として、

真相が（誰かによって）隠されたり。

の如き無生物主語の受動構文があらかじめ成立していなければならない。しかし、日本語の伝統的受身構文は、話主や動作主の迷惑や被害を表示するものが主流であり、「受動性」を客観的に把握するような話主から自立した無生物主語受身文は存在しなかった。

この寺は何年何月に建てられたり。

かかる事態が（某によって）もたらされたり。

このような無生物主語を取る客観的受身構文や抽象的受動構文は、伝統的日本語文において存在しなかった。この傾向は、現代日本語の談話にまで及んでいると思われる。我々は、くだけた会話では「この寺は、江戸時代に建てられたんです。」と言うより、「この寺は、江戸時代に建ったんです。」という表現の方を好むだろう。あたかも寺が自力で建ったかのような表現である。日本語文法体系において受動性が積極的に位置づけられなかった理由は、「消ゆ・絶ゆ・燃ゆ」などの自発性語尾に類推して成立した奈良時代以前の「ゆ・らゆ」も、「掛かる・寄そる・当たる」などの自動詞語尾に類推して成立した平安時代以後の「る・らる」も受動性を意味の中核に持たなかったからである。日本人が明確に受動性の存在を認識したのは、漢文の受動性形式である「被・見・所」などを「る・らる」に訓じてからのことであろう。日本人は、言語表現における受動性の概念を漢文訓読を通じて知ったと考えられる。

其の水を決り棄テテ、下に過ぎ令（め）ず [不] [於] 決（ら）所たる処、卒に修補すべきこと難し

（『西大寺本金光明最勝王経』巻9 平安初期点）

後更ニ王有（リ）テ、[知] 其（ノ）仙ノ菓ノ為ニ変（セ）所（レ）タルコト（ヲ）知リテ侍臣ニ謂（ヒ）テ曰（ハク）

（『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝』巻4 康和元年点）

漢文訓読の場で成立した上のような「他動詞・受身・タル・名詞」の語脈は、まもなく安定的な統語構造として定着したと考えられる。その理由は、平安時代の散作文芸に次第にこの語脈が増加してきたからである。『源氏物語』では私の調査ではこの語脈は8例見いだされ、そのうち次の6例が形容詞的用法であると考えられる。

建てられたる御堂 ゆるされたる有様 繕はれたる水 かしづかれたるさま 思ひおとされたる人
たゆめられたる妬さ

わらひたてられたる程（『落窪物語』）

造られたる船ども（『紫式部日記』）

踏み返されたる橋 籠められたる四方 助けられたる男（『宇治拾遺物語』）

私の調査のかぎり平安時代の文芸作品に見いだされるこれらの用法は、形容詞的用法と認めることが出来るが、具体的文脈に即応した一回限りの語脈と言わざるを得ない。これらは、自動詞を資源にした「枯れたる」「荒れたる」「優れたる」「老いたる」「痩せたる」「乱れたる」などの用法における文脈離散性と汎用性に遠く及ばない。平安時代の「他動詞・受身・タル・名詞」の統語構造は、おそらく成立して間もない状況であったと想像される。伝統的受身文に関する制約を受けながらも平安時代に成立した「他動詞・受身・タル・名詞」の統語構造に基づく語脈は長らく生き続け、江戸時代に俳句という極限的な短詞形文学の中で活躍の場を見いだしている。

疑はれたる長崎の心根（『西鶴織留』1694刊）
 切られたる夢はまことか蚤のあと（『去来抄』1775刊）
 離別れたる身を踏み込んで田植哉（『蕪村集』）
 去られたる門を夜みる幟かな（『おらが春』1852刊）

これらの語脈は、ある限り採集したわけではないが、被害、迷惑の受身を元にしていて、よってこれらの形容詞の用法は、伝統的受身構文の枠組に添ったものであるが、明治以後の「魅せられたる魂」「開かれた大学」のタイプの語脈への重要な橋渡しとなった。

6. 欧語脈との邂逅

幕末明治期になって日本人はついに欧語の「過去分詞・名詞 broken door」型の名詞修飾と出会うことになった。英国砲隊士官ブリックリ著『語学独案内』（初編は印書局、二編三編は日就社、明治8年1875刊）という英語教科書がある。英語文の日本語訳は、東京中流層で話されていたと思しい会話体によっており、日本人の関与が示唆される。注目されるのは、動詞の過去分詞を用いた形容詞用法を日本語訳では受動表現を避けていること、また英語文のモノ主語による受動構文を日本語訳では能動文によって対応していることである。

Dilapidated 破レタル（形容詞） Rotten 腐タル・朽タル（形容詞）
 Skilled 巧者ナル・練熟シタル（形容詞） Self-possessed 落付タル（形容詞）
 Unwarranted 無理ナル・条理ナキ・許ナキ（形容詞） A withered tree 枯タ木 A cracked pot 破鍋^{われなべ}
 If it cannot be done by persuasion, it must only be done by force 理ヅメダイケナケレバ力^{ちからづく}特^{とれ}デスルヨリ仕方ガナイ
 Various useful medicines are obtained from preparations of sea-weed. 海草ヲ製シテ種々良^{いろいろよくすり}薬ガ取マス
 The sail is hoisted, but there is no wind to fill it. 帆ガ掛ケテアルガ風ヲ含^{ふくま}ナヒ
 Wheel traffic is stopped there during the repairs of the bridge. 彼所ハ橋普^{あそこ}請^まデ車留ガ為テアル
 Gunpowder was invented by a monk. 火薬ハ坊子^{ぼうず}ガ發明致シタモノダ

本書では過去分詞による形容詞用法を「ラレタ（ル）・名詞」のように受身助辞を用いて訳した例が存在しない。この事実は、「他動詞・受身・タル・名詞」による形容詞的用法が伝統的な日本語において存在せず、特に談話において忌避されていたことを反映するであろう。その原因は、もちろんモノ主語受動文の不在という日本語の特徴が干渉した結果である。しかしながら明治後半期になると翻訳文を中心に受動態を受身助辞で対応する例が出現し始める。西洋語の過去分詞による形容詞的用法を「ラレタル・名詞」と受身助辞を使って訳した例は、明治30年代から出現したと推測される。

われは愛す、何とは無しに愛す。われは戦慄す、魅られたる人（un homme charmé）の如くに恐る。
 （上田敏『牧羊神』明治41年）

上田敏は、フランス語の過去分詞を使った形容詞的用法を「魅入られたる」と受身助辞を用いて訳している。

世界は広い。世界にはフランスと云ふ国がある。此の事実は、虐げられたる我が心に、何と云ふ強い慰めと力とを与へるであらう。フランスよ、永世^{とこしへ}に健在なれ！（永井荷風『ADIEU(わかれ)』明治41年）

他動詞を自動詞に転換する形容詞的用法が被害の受身を基調とする伝統的受身構文の制約を受けながら近

世期に出現したことは、日本文法史上の画期的な展開である。

江戸時代の短詞形文芸で見た「去られたる門」「切られたる夢」などの自力で開発した形容詞的用法を保留する一方で、幕末明治期に非人格的なモノを主語とする西洋語の受動表現に接した際にも翻訳では伝統的談話構造を反映して能動態で訳さざるを得なかった。

明治30年代以後、文章語が確立した後の欧文翻訳では過去分詞を用いた形容詞用法を「ラレタル・名詞」の受動表現で対応するようになった。これによって、欧文受動動詞による広範な形容詞的用法を日本語の文章構造の中に取り込むことが可能となり、その結果、日常的談話を反映しない「約束された土地」「開かれた大学」「失われた十年」のような、独特の格調を伴った文章表現が可能になったのである。